「故郷」のかたち
―在日韓国・朝鮮人 2 世における生活文化の語りから

How do Second Generation *Zainichi* Korean Women Depict "Homeland"?:
An Analysis of Two Interview Cases

橋　本　みゆき
HASHIMOTO Miyuki

Key words: 在日韓国・朝鮮人、生活文化、故郷
Zainichi Korean, living culture, homeland

Abstract

In this study, I examine two interview cases of second generation *Zainichi* Korean women regarding living culture to understand how they depicted the concept of their "homeland." I study their life stories focusing on three aspects: food, visiting the Korean homelands of their parents, and knowledge or power to survive in Japan. The two interviewees have some common points: they live in Korean towns in Japan, understand the Korean language, and have been to the homelands of their parents. In this sense, each "homelands" are relatively visible. When considering living culture, I cannot use flamework of nation, because they only talked about his/her everyday life. And it is not sufficient to only consider the father's or mother's birthplace in order to understand their configuration of "homelands." As a result, we can say that their concept of "homelands" has been constructed based on factors such as family life experienced in a local society of Japan during childhood, and parents' personal history and way of living. Life stories about their living cultures reveal that their configurations of "homelands" are based on everyday life in Japan.

1．はじめに

在日韓国・朝鮮人[1] の「故郷」を語るのは容易いことではない。『在日朝鮮人「ふるさと」考』（以下『ふるさと考』と略）に収録された李恵子（イ・ヘチャ）（大阪市生野区在住）のエッセイに、次のような一節がある。近所の教会の南米人神父と道で会った李は、並んで歩きながら「コヒャンはどちら？チェジュド？」と問われ、八つ当たりしたい衝動に駆られた。

> 神父さま。あなたのおっしゃっている「コヒャン」というのは、私が出生したところのことですか。いつかはわからないけど帰っていくべき場所のことですか。それとも、今、私が生きている土地のことですか。
>
> 「コヒャン」はどちら、なんていう質問、私にはとてもひとことで答えられるものではないのです。たとえ、十万や百万の言葉であっても、答えられる自信はありません。（中略）
>
> 「コヒャン」はここだ、と何の躊躇もなく、どもりもせず、口ごもることもなく、大っぴらに言えるひとが、私は、ただ、羨ましいのです。（中略）でも、単純になることを私は許されてはいません。今は、少なくとも、まだ明快なこたえを得るべきではないと思っています（李、1998、pp. 113–4）。

とは、実際には言わなかった。しかしこんな思いはこの日が初めてではないという。この直前に神父が訪ねたある在日 1 世の話題から、突飛な質問では決してなかった。中学生の息子がいるという李が単に「こたえ」を知らないわけではない。そして生野には済州島（チェジュド）を故郷（コヒャン）＝本籍地とする在日韓国・朝鮮人が多い。それでも、「単純になること」、「ひとこと」にまとめさせられることに抵抗を覚えたというエピソードである。

『ふるさと考』[2] は、「故郷」をめぐるエッセイや論考を多数収めており、1 冊全体でその「単純」でなさを表している。とはいえ「故郷」は大きく 2 通りに捉えられる。一つは、祖先（特に父親）の出身地、つまり朝鮮半島の本籍地だ。たとえば他の収録エッセイでは、「オモニ（朝鮮語で「母」）の味」の起源として「慶尚道」（朝鮮半島南部の地方）を挙げる（金栄、1998）。もう一つは、執筆者自身が生まれ育った場所、すなわち日本のどこかの地域である。具体的には生野のほか、川崎「群電前」（金秀一、1998）、下関「泥棒マーケット」（姜、1998）と呼ばれた在日韓国・朝鮮人集住地域が挙げられた。上述の神父は前者の意味で尋ねている。

本稿は、在日韓国・朝鮮人 2 世の生活文化（の継承）のライフストーリーをもとに、単純ではない「故郷」のかたちを素描してみたい。渡日 1 世の親との生活経験とその語りに、語り手たちの「故郷」はどのように表れ、そこから何が見えるのだろうか。渡日 1 世にとって朝鮮半島は、生活習慣や価値観、人間関係とその記憶が経験的で確かな地である。しかし日本で生まれ育った在日 2 世は 1 世と同じ根拠を持てない。戸籍なり親戚の存在なり出身家庭の習慣なりの手掛かりがあればリアリティは増すだろうが、関わりは間接的・部分的なものだ。だからといって日本の出生地を答えても、李のような不完全燃焼が生じる。「故郷」をめぐる親＝ 1 世の影響やギャッ

プをどう考えたらよいか。もとより「故郷」は、この小論で扱うにはあまりにも大きく深いテーマである。ここでは、生活文化の経験の語りに現れたさまざまな「故郷」のゆるやかな形に迫ることにしたい。

2．先行研究と研究方法

『ふるさと考』掲載のインタビューで、徐京植は語る。いわく、在日朝鮮人の状況において、「故国」（生まれたところ、故郷）、「母国」（現に属しているところの国）、「祖国」（ルーツ、先祖の出身地）は、分けて考える必要がある。ほとんどの日本人は 3 つが一致するのに対して在日朝鮮人の場合 3 つが分裂しており、「故国」と「祖国」は対立、「祖国」そのものが分断、しかも価値において互いに対立し、各自の中にその対立した価値観が内在している（徐、1998、p. 28）。徐は、生まれ育った「日本」、国籍表示の形で記された「韓国」または「朝鮮」、本籍地ないし地理概念としての朝鮮半島の間の、錯綜と相互否定に伴う痛みや苦しみを問題にする。徐が「朝鮮半島、故郷」を語る言葉は、どれもネーションの単位である。それ自体は抽象的に「故郷」を語る鋭い知識人言説であるだろう。

確かに在日韓国・朝鮮人の「故郷」は、国家レベルの制度的・政治的条件により規定されることがあまりにも多かった。大韓民国（韓国）とは国交が樹立する 1965 年まで、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）とは現在もなお、日本との往来は非常に限られてきた。また戦後日本で朝鮮半島出身者は当初一律に「朝鮮籍」（後に「韓国籍」という選択肢も追加）と扱われた。往来困難な中での本国関連事業（帰国運動[3]、母国墓参訪問団[4]、母国留学[5] 等）、日本国内では法的地位や社会保障制度の適用制限、近年は韓国の在外同胞政策[6] にも翻弄された。国家の枠組みが強力に見えると、何らかの政治的立場が生まれたり、同胞関係に溝が生じたり、マジョリティによるレッテル貼りが広がったりした。けれども「故郷」は、必ずナショナルな語彙で語られるのだろうか。また、常に痛みや苦しみを伴うものなのか。

徐は、「大きな国家とか民族の正史に回収してしまうのではなく、人々の一つ一つの生の痕跡というものを、どう残すのかというのが、我々在日朝鮮人の重要な課題として持ちあがってきている」ともいう（徐、1998、p. 18）。ここでバーバを持ち出すと、それはマイノリティの「ナラティブの権利」（バーバ、2009、p. 7）に関わるだろう。しかし同時に、マイノリティのネーション物語をも再検討し修正する可能性にも思い至る。「故郷」とネーションの関係は大きなテーマであり、ここで論じ尽くせるものではない。しかしまったく避けても通れない。ネーションの視点を排除することはできないが、本稿では他の視点により注意深くありたい。

そもそも生活文化[7] は、「民族文化」や「伝統文化」とは違って、ナショナルな枠[8] ではあまり語られることがない。日常生活のこまごましたやりくりに公権力が関心を向けることはそうないからだ[9]。生活文化の世代間継承に関する先行研究としては、大学生の親・祖父母を対象に子ども時代の衣食住や家族関係を尋ねた家政学的質問紙調査（末広・石田・竹林、2007）がある。各

世代の傾向や変化（例：手作り保存食の部分的継承性）や、調査地域の地域色（例：子ども時代の居住地分布）[10] などがマクロな考察としてうかがえる一方、そこにナショナルな語彙はほとんど現れない。

そうした生活文化を、在日韓国・朝鮮人 2 世による継承として考えると、渡日 1 世の故郷・家族はやはり重要なポイントである。2 世つまり日本生まれであることで、彼／彼女は必然的に 1 世の親の朝鮮半島での記憶や経験と居住社会日本の現実との間に立ち、その不確かなつながりに身を置いているからだ。故郷が異なる父と母の間に立つこともあるだろう。

本稿は、生活文化のライフストーリーに現れた「故郷」を分析対象とし、語りの文脈上に浮かんだその様々なかたちを拾っていく。以下の記述では、「故郷」と鍵カッコつきで書く場合には、2 世におけるそうした重層的な「故郷」の意味合いを含意し、他方、単に親の出身地を指す場合には鍵カッコをつけないで書くことにしよう[11]。そして分析では次の 3 点を念頭に置く。一つは、ネーションという枠に回収しないこと、次に、複数レベルで「故郷」を捉えること、そして、そのストーリーを家族生活の文脈から取り出すことである。

3．調査概要と分析方法

3. 1. 調査対象者のプロフィール概要

筆者は 2014 年から 2017 年にかけ、在日韓国・朝鮮人の 1 世から 2 世への生活文化継承をテーマとする共同研究調査[12] をおこなった。本稿が分析対象とするのは、そこで得たインタビュー事例のうち、在日韓国・朝鮮人 2 世女性の盧芳子（ノ・パンジャ）さんと黄玲玉（ファン・リョンオク）さんである（両者とも仮名）。分析に先立ち、2 人のおおまかなプロフィールを掲げておこう。

盧芳子さんは神奈川県川崎市在住で、インタビュー時点で 66 歳。慶尚北道出身の父（1911–1996）と慶尚南道出身の母（1918–2014）のもと、1949 年、7 人きょうだい（1 男 6 女）の四女として生まれた。15 歳のとき、一家の疎開先だった埼玉県郡部から川崎市南部の N 地域に移り住んだ。中学まで日本の学校に通い、高校は朝鮮学校に学んだ。キリスト教会には 30 年間母と一緒に通った。1994 年には母国墓参団事業で、母・妹とともに初めて訪韓した。

黄玲玉さんは、大阪市生野区のコリアタウンに住み続けてきた 63 歳。済州島出身の両親（父 1915–2004、母 1925–2016）のもと、1953 年、4 人きょうだいの長女として生まれた。両親は再婚同士で、異母きょうだいもいる。小中学校段階は朝鮮学校、高校以降は日本の学校に通い、結婚・育児が一段落してから大学院まで進んだ。韓国とりわけ済州島に関する調査研究に携わり、韓国生活も 2 年ほど経験。夫の父祖の地は忠清道。合わせて 4 人の親を見送った。

両者の共通点として留意されたいのは、人生の大部分を在日韓国・朝鮮人集住地域で暮らしてきたこと、朝鮮学校就学経験があり朝鮮語がわかること、そして母親とその故郷を訪ねた経験が

あることである。すなわち、2 人の「故郷」の輪郭は比較的明確なのだ。逆に、これらの資源をもたなかったら、「故郷」を語るのはそう容易でなかったかもしれない。共通点に注目して 2 事例を選んだのは、変数を抑えることで、多義的で力動的な「故郷」像が一定程度比較対照できると期待するからである。実際彼女たちは、父母の故郷について比較的明快に語った。「故郷」の複数のリアリティ、その可塑性を、それぞれに一貫性あるストーリーとして描いてみよう。

3. 2. 生活文化のライフストーリーにおける「故郷」

在日 2 世の語り手は、1 世の親からの生活文化（継承）の語りに「故郷」をどう取り込んだのか。どんな内容の生活文化を経験し、実生活の場である現代日本とどうすり合わせ、どのように親を評価し、また自分にとってはどのようなものと意味づけ、そのタイミングはいつであったか。そしてどんな文脈に乗せて語ったのか。本来「故郷」を主題としたインタビューではないため、語りが直接その答えではないけれども、生活文化の源泉をどこに求めたかはいくらか観察可能である。具体的には、『ふるさと考』で洗い出した 2 つの「故郷」、すなわち親の出身地と語り手本人の出身地が浮かび上がった。ただしネーションに枠づけて終わりではないのである。

その「故郷」が何らかの像を結ぶ[13] トピックとして、食べ物、（親の）故郷訪問、日本で生きる知恵や力の 3 つに注目する。物質的で可視的な項目もあれば、非物質的だが影響が大きい項目もある。次節では各トピックにおけるさまざまな「故郷」の表れかた・内容構成を拾っていこう。

4 .「故郷」をかたどる生活文化の語り

まず盧芳子さんの事例について、生活文化のライフストーリーから、とりわけ「故郷」に関連する語りを取り出して記述していく。続く黄玲玉さんの事例分析では、芳子さんと共通する／異なるポイントに留意し、若干の考察を加えていく。

4. 1. 盧芳子さんの「故郷」のかたち

芳子さんの母は、不本意な経緯で 12 歳のとき単身渡日した。3 年後に見合い結婚。結婚後は家事育児を一身に担ったほか、何か仕事があれば朝早くから夜遅くまで働きに出た。一方、芳子さんの父は高利貸しやスクラップ業を営んでいた。酒が入ると手が出たが、普段はやさしい父親だった。また父はかつて支配階級であった両班の家系で、幼い頃は書堂（朝鮮の近代以前の教育機関）に学び、渡日後も盧家のチェサ（祖先祭祀）を大事にした。芳子さんの両親はよく、故郷での暮らしや朝鮮と日本の歴史的関係について子どもたちに話してくれた。なお 7 人きょうだいのうち、姉が 1 人、北朝鮮に「帰国」している。

埼玉の「田舎」で生まれ育ち、思春期以降は川崎の「（朝鮮人）部落」で暮してきた芳子さん。その生活文化の記憶の語りには、さまざまなレベルの「故郷」がみてとれる。

4. 1. 1.　食べ物

辛い料理

芳子さんが幼い頃、近所には日本人の家ばかりだったが、一家の食卓には、いつもオモニ（朝鮮語で「母」のこと）の作る辛い料理が並んだ。

＊（調査者）：朝鮮料理？

盧芳子：えーとね、辛かった。大根のキムチと白菜のキムチが、こういう木の樽に、あれにオモニ、よく漬けていて。大根のキムチはこんなに大きいんですね。（そのほか）日本人のまねをして、教えてもらって、黄色い沢庵を、よくオモニ、漬けて。あと梅干しは毎年漬けてくれて。おかずはやっぱり辛かったですね。魚はだいたい決まってて、カルチ（太刀魚）とニシン。

（略）

小学校のとき、卵焼きを作ってもらったことがないんです。オモニに家に帰って「卵焼き作って」と言ったら、「卵焼きって何だ？」と言われた。日本のおかずは、コロッケを揚げたのを買ってくるけど、日本のおかずってなかったですね。ナムルがあって。

芳子さん自身は「朝鮮料理」とは表現していない。しかし「やっぱり」辛いおかずばかりだったという。要するに、よくある「日本のおかず」ではないものだ。

節句の海苔巻き

ただ芳子さんは続けて、梅干・沢庵といった漬物類を挙げている。加えて、日本の家庭のような料理があったのもいくつか思い出していった。

あ、でもこれは作れました。きんぴら、真似して作ってました。あとお稲荷さんと、きんぴらの入った海苔巻。ニンジンとごぼうの入った海苔巻を作れるようになって、おひなさまの時に、近所の家がおひなさまを飾るんで「うちも」と言って、「みんな海苔巻を食べるから」と教えてもらって、それを作ってくれて。それはすごくおいしかった。忘れないです。

「近所の家」に倣ってひな祭りに「海苔巻き」を作ってくれたという。季節にちなんだ日本式の特別献立もまた、忘れられない「オモニの味」となっている。

独特のトックッ（朝鮮風雑煮）

芳子さんが好きではなかった料理もある。雑煮またはトックッ（餅スープ）だ。母は朝鮮風のトックッを作ったり日本人の真似をして日本風の雑煮を作ったりしたが、芳子さんはどちらも食べなかった。しかし後年そのトックッは甥・姪の人気を博す。母に教わって芳子さんも作ってみたが、「あのハルモニ（おばあちゃん）のトックの味は出せな」かった。

大根とこんにゃくと……えっと、別にまず鶏をゆでるでしょう。（中略）みんな別々にしておくんです。それで、牛肉を煮たスープと鶏のスープを、食べる時にこっちの鍋に少しずつ入れて、トック（餅）をお水に浸けておいたのをここに入れたら、器に入れるでしょう、そしたら大根とこれを別々に入れるんですよ。ここに鶏とかお肉を載せて、セリとか三つ葉とかノリを載せて、錦糸の卵っていう。オモニの独特のやり方なんですよね。

「独特」となるともう、朝鮮由来なのか日本で覚えたものかは判然としない。

料理だけでなく、身体からアクを抜く方法や薬草の知識、ドブロク造りまで、母は何でもよく知っていた。それは母が、朝鮮の故郷で上のきょうだいが幼いうちに死んだため、姉に代わって長女役割を担っていたことが関係しており、親からいろいろと教え込まれたのだ。けれどもそのような知恵を、芳子さんのきょうだいは誰も引き継いでいない。

4. 1. 2. （親の）故郷訪問

嘘は言ってなかった

1994 年、芳子さんは父母の故郷を訪ねた。70 代になった母が、元気なうちに両親の墓参りをしたいから一緒に行ってほしいと言うので、芳子さんは妹も誘って同行したのである。芳子さんには初めての韓国であった。父の故郷の村に行ったとき、母はそこが「△△盧氏」だけが住む村であるとか、父の生家や父の通ったソダンの跡を教えてくれた。

ふだんから父母は自己紹介するとき、それぞれ「△△盧氏イムニダ」、「大邱タルソン〇氏イムニダ」と姓の前に本貫（宗族の始祖発祥の地）（伊地知、2010、p. 390）を付けて名乗っていた。そのため子どもたちは、コヒャン（故郷）はどこかと人に聞かれたらすぐに父祖・母方の故郷を言うことができた。また父は、朝鮮の親族の集合写真を 2 枚持っていて、よく説明をしてくれた。父によれば、「△△盧氏」は村長だった。「でも現実見てないからあまりピンとこなかった」。興味も覚えなかった。「なんで村長までした人が日本に来るの？」と疑い、その頃は親を「下に見て」いたという。歴史がある家系だと聞かされても、「日本で通用しないし、今の状態見たらそんな（信じられない）。『アボジ（お父さん）、デタラメ言ってる』みたいな」受け止め方だった。

「でも後になって、大人になって少し知って、『嘘は言ってなかったな』と」思えたそうだ。現地で自分の目で確かめ、またその前から大韓基督教会で牧師などに在日韓国・朝鮮人の歴史や父母を敬えという聖書の教えを「第三者を通して」聞くうちに、少しずつ「心が韓国・朝鮮に向くように」なった。親の故郷を、自分につながるものとして受け止める条件が、徐々に揃っていったのだ。

「二度と帰らない」

母自身にも、故郷再訪実現には心情的な壁を越える必要があった。そのことを芳子さんはいくつかの機会を捉えて徐々に理解していく。

まだ少女だった母が日本語も読めない状態で一人渡日することになったのは、親が占い師から「（この子は）ここにいると生きない、命がない運勢」だと言われたからだった。母は名古屋の知り合いのもとにたどり着き、泣きながら働いたという。そして日本で結婚し、母は生まれた赤ん坊を両親に見せに帰郷した。ところが風邪をひいて家人に飲まされた薬が原因で、その子は死んでしまう。帰ったら夫に怒られるだろう、日本はつらくて嫌だ、帰りたくないと、母はお母さんに泣いて頼んだ。すると、「この村には出戻りを置くような家は、一人もいない。村に置いたらいけない」と言われてしまったそうだ。

50 年ぶりに故郷を訪ねた帰り道、母は当時の思いをバスの中で芳子さんに話してくれた。「『もう二度と朝鮮の土は踏まない』って。自分は日本に帰りたくないけど、親が置いてくれないし。ということで覚悟を決めた」と。

故郷のお母さんの危篤の知らせを受けたときも、母は帰ろうとしなかった。そのとき母は、自分が韓国に行くことで「北にいる娘」に悪影響が及ぶのが心配なので行けないのだと芳子さんに説明した。しかしそれだけではなかったのだ。お母さんに「日本に戻れ、帰れ」と言われて「後ろを振り返らないで（再び日本に）来た」ときの母の思いを芳子さんが聞いたのは、母の晩年、10 年ほど介護した頃だ[14]。そのとき芳子さんの中で、母が故郷を訪ねた際、両親の墓前に立ち「アボジ、オモニ、□□（母の愛称）が帰ってきました」と言って 30 分ほど泣き続けた記憶とつながった。

芳子さんが最終的に理解した、母の故郷との因縁や親への複雑な思いの全体像は、とても一言で語れるようなものではなかったのだ。

懐かしさ

ところで芳子さん自身は、初めて韓国に行ったとき何を感じたのだろう。

「韓国に到着します」という機内アナウンスが聞こえたとき、「すごく感動したのを忘れません」と芳子さんはいう。その一方、釜山に行ったときの心境を次のように話した。

> 韓国の釜山で、川崎に来た時のその当時の感触が感じられて、すっごく懐かしくて「いいな！」、と思った。すごく。人間と人間の交流、開けっぴろげで。それは田舎に住む時は味わえなかった。

15 歳で引っ越した川崎の話題の流れで触れたので、川崎に軸足を置く語りではあるのだが、とにかく芳子さんが「懐かし」さの起点としたのは、日本での居住地域である。

川崎の長屋暮らしでは、「こういうところに人が住んでいるのか」と驚くばかりだったという。男女の別なく 10 人で使うトイレ、持ち主不明の石鹸、壊れたガラス窓。「本当に（朝鮮）部落でした」。けれどもそこならではの楽しい思い出もある。

> 暮れ、30 日、31 日になると、N の家がどの家も電気つけて、正月の準備をして。それが一瞬のお祭

りのように活気があるんですよ。それでオモニに「あれ買うのを忘れたからちょっと（近所に）行って借りてきて」って、借りに行く、そして今度買い物行ったら、ちょっと返す。返す時に 1 つおまけをつけて返すとか。おかずが美味しくできたら「この間のお返しに持っていきない」。ご飯を食べる時、ご飯がなかったら、「ご飯を食べさせて」って。それが、ずっと通りがあって、目の前に何所帯か交流があって行ったり来たりして。家の中に必ず行ったり来たりがあって、私はそれが「いいな」と思って。

その感覚が釜山で蘇ったのだ。

この語りの後、芳子さんはふと思い出したように当時の母に言及した。埼玉では近所に朝鮮人がいなかった。子どもたちとは違って母は日本人とも交流がなく、日本語はほとんど話せなかった。その頃、「本当に寂しかったのではないかな」。それでだろう。母は、渋る父を尻目に、戦前暮していた川崎への引っ越しを決行したのである。母は川崎に朝鮮を投影したのかもしれないが、芳子さんの原風景は川崎にある。

4. 1. 3. 日本で生きる知恵・力

朝鮮人としての誇り＝同じ人間であること

埼玉で小学校 1 年に入って間もなくの頃、芳子さんは男子 5 ～ 6 人に帰り道で待ち伏せされていじめられたことがある。日本語読みの「ろ・よしこ」を名乗っていたが朝鮮人だとわかったらしく、「朝鮮人は学校に来るな」と言ってぶたれたり、引っかかれたり、持ち物を踏みつけられたりした。芳子さん自身は「朝鮮人て何かな」と思うくらい幼くて事態が飲み込めなかった。負けん気が強かったのでやり返したものの、よけいやられてしまった。悲しくて悔しくて、家が見えるところまで帰るなり思い切り泣き叫んだ。

そしたらオモニが裸足で飛び出してきて、私の姿を見て「アイゴ！（ああ）アイゴ！ オトケ（どうして）……」と言って、「ぶたれた、朝鮮人だからってぶたれた！」と言ったら、オモニが「アイゴ！ アイゴ！」と（抱擁）やってくれたんですよね。「なんで、朝鮮人って言われたら……『日本人じゃない』って、明日行ったら、ちゃんと言わないとだめだ！」と言われて、次の日に言ったんですよ。そしたら、「何を！ 朝鮮人のくせに」とすごくやられたんですよ。（中略）3 日目の時に、オモニ、出てきてくれなかったですよ。「オモニ、どうして来てくれないかな。オモニいないのかな」と思って玄関に入ったら、オモニがその時、白い割烹着を着て、後ろ向きになって背中が震えてた。私、玄関に入った時にすぐ分かって、「わ、私も哀しいけれど、オモニも私が泣いて帰るのが辛いし哀しいんだな」と思って。それからはもう、泣いて家には帰らない。

以来、泣いたら涙が乾いてから帰るようにした。

姉たちも似た経験をもつ。そんなとき母は、姉の手を引いて一軒一軒、相手の家に抗議に行っ

た。相手の子を呼んでもらい、娘に謝るよう片言の日本語で求めた。子どもが謝らないときは「どうして謝らないんだ。朝鮮人のどこが悪いんだ？ うちの娘は仲良くしたいのに」と怒り、そして相手の母親に、「なんで息子に……親が言うから子どもがそういうこと言うんだから」と詰め寄った。

そのとき芳子さんが思ったのは、「やっぱり、よその国に来てね、こんなふうに嫌な思いをしなきゃならないのは、朝鮮は貧しくて、いやだな」ということだ。しかし父や母が「人間として堂々として生きているんだから日本人からバカにされる筋合いはないんだというのを、日本人に言ってるのを聞いて、それは『いいな』と思った」。大人になって改めて本当だと感じている。「日本人に対して同じ人間なんだ」、「ただ国が違うだけなんだよ」。両親のそのような教えを、「朝鮮人としての誇り」と芳子さんは表現した。そんな「誇り」が、他郷で生きる父、母、そして芳子さんら日本生まれの子どもたちを支えてきたことは、想像に難くない。

日本で頼るもの

芳子さんにとって、実は母は長い間「怖い」存在であった。母は自分の価値観で決めつけて一方的に怒るところがあり、親に対しての子という立場も芳子さんを縛った。しかし芳子さんが 34 歳くらいの頃から、具体的には教会に通い始めてから、見る目が変わってきた。一緒に過ごす時間が増え、見守るような立場で母を見、理解できるようになると、怖くはなくなったという。

芳子さんが通い始めて 2 回目の日の帰り道、母は次のように話してくれた。

> 「私は日本に来て誰も頼る人がいなくて、友達もいなかったし、本当にさびしくて辛かったけど、いろんな苦しいことはあったけど、あそこの神様がいいというとあっちの神様」、だから（母は埼玉の）村にいる時にね、狐の神様がいると油揚げあげたり、石碑があるとそこに拝んだり、道の木の所に行くと拝んだり、どこに行っても拝むんですよ。なぜそんなに拝むのかなと思って。そしたら、「私は頼るものがなくてきたけれど、60 過ぎてね、主イエス様だけが私の本当の神様だという言葉を、私は分かった」って。これはオモニの生きた本当の言葉だなっていう。そういうオモニの言葉を聞きながら、オモニと一緒に 30 年間教会生活をしながら、少しずつ（理解を深めた）。

母がクリスチャンになったのは、芳子さんよりも 2 年早い。それまで盧氏の供物の盛り方や食器の置き方などの細かいしきたりを夫から教わって、夫婦でチェサを取り行なってきた。けれども、教会に通うようになると、母は儒教儀礼であるチェサを一切やめてしまった。その前は高尾山に通い、創価学会にも入っていた。当時父は宗教に否定的で、母がお経をあげる傍らで酒を飲んだりちゃぶ台をひっくり返したりした。普段は夫を立てた母も、宗教生活に関しては譲らなかった。「頼る」ことができる「私の本当の神様」を、母はようやく見つけたのだ。信仰を共にし、母の「本当の言葉」に理解がある芳子さんもまた、母にとっては味方のような存在になったかもしれない。

ここまで芳子さんの在日1世の親、とりわけ母から学んだ生活文化についてライフストーリーを読んできた。母が朝鮮から持ち込み、日本で培ってきた生きる術を、芳子さんが様々な機会に見てとってきたことがうかがえる。教わるだけでなく、芳子さんの経験や感情、理解、相互行為の産物として、生活文化の語りが構成されている。そこで描かれる「故郷」は様々な形をとって、変化もし、朝鮮半島そのものとはいえないが無縁でもないものだ。

4. 2. 黄玲玉さんの「故郷」の受容のかたち

次に、黄玲玉さんの生活文化のライフストーリーを読んでいこう。芳子さんと同じ3つのポイントから「故郷」に迫りつつ、芳子さんとの相違に注意しながら記述していく。

玲玉さんの母は商売のために渡日したものの船の事故に遭って戻れなくなり、同郷者たちを頼って大阪に住みついた。一方、父は中学校進学を夢見て、先に渡日していた親兄弟に合流する形で大阪に来た。父母が定着した経緯はそれぞれだが、身内や同郷者が複数いて頼った点は共通する。結婚後、主導権を握ったのは母である。紳士服をまつり縫いするマトメという母の内職仕事には、一家総出で駆り出された。玲玉さんが子ども時代を送った1950～60年代は社会の変化が目覚ましく、人々の生活水準は向上し、子どもの進学率も高まった。1965年に日韓国交が樹立し往来の道が開かれたことも、母にとって重要な意味をもった。

4. 2. 1. 食べ物

参照枠組みとしての「済州島」

玲玉さんの食べ物の語りで特徴的なのは、参照枠組みとして「済州島」や「韓国」がしばしば登場することだ。家で食べていたものを尋ねると、玲玉さんは次のように語った。

黄玲玉：オモニが作ってたから、済州で食べてたような、イワシのスープ。夏とかは。でもカルチ（太刀魚）のスープは食べたことがなかった。それで病気のときは、アワビのおかゆやったし。私ら子どもたち身体丈夫じゃなかったから、春と秋には朝鮮人参、それも5つって決めてはんねん、5つをつぶして、それに鶏かアワビかを入れておかゆを鍋に1つ作って。

（略）

＊：（朝鮮）人参は朝鮮市場で買ってた？

黄玲玉：いや、それは韓国から送ってもらってたんちゃうかな。私の記憶はそうや。

1966年以降、母は済州島に何度も里帰りした。玲玉さんも、母のお伴で行ったり、また半島部に留学・出張したり文献を読んだりして、韓国ないし済州島の社会や文化、親族になじんでいった。日本に住みながら、母の料理も玲玉さんの視座も、済州島に直接つながっていた。

アワビ粥と常備菜

風邪を引いたとき、母は決まってアワビ粥を作ってくれた。日本では高級食材であるアワビだが、母の判断基準は値段ではなかったのだ。

確かに高価やけど、済州島ではそうやって食べるから、オモニはそうやって、子どもにはそうしてた。（略）

身体、滋養高めないと回復しないからと思って、たぶん精いっぱいお金出して買って、作ったんじゃない？ オモニの中でいうと。それがうれしかったよね。普段めちゃ怖いけど、叩かれたりとかしてるけど、病気になったときはすごく優しかった。だからそれは、病気のときの、優しいオモニのおかゆっていう感じだったよね。

玲玉さんにとっても、母はずっと「怖い存在」だったという（後述）が、ここでは母が体に良いものを作ってくれたという「優しいオモニ」の記憶である点を確認したい。アワビ粥は、今では玲玉さんが自分の娘の体調が悪いときに作ってやる定番の一品になっている。

母はキムチ、ナムル、チャンアチ（醤油漬け）といったおかずも一通り作ったが、玲玉さんはそれを「たぶんね、買ったら高いから」、「済州島で作ってたからだと思う」と、特別の意味はないものとして語った。コロッケやハンバーグなどの総菜を商店街で買うこともあったが、それは「料理にかけてる時間とかもったいないから」だと説明した。母の方針は、日々のおかずに頭を悩ませることなく、また時間とお金をかけず、その分内職仕事をできるだけ進めることだったと、玲玉さんはみている。

母は常備菜の作り方も教えてはくれなかった。「だって教えてる時間とかないねん」と玲玉さんはいうが、時間の問題だけではなく、伝授すべきだという認識は母娘ともになかった。しかし味は覚えており、玲玉さんもある程度年がいってから作るようになったそうだ。

ハレの日の巻き寿司

玲玉さんの母の手料理に、芳子さんの母と共通する一品がある。巻き寿司（芳子さんの呼び方は「海苔巻き」）だ。学校で運動会や遠足がある日、母はいつも「巻き寿司もどき」を作ってくれた。現在韓国で食べられているキムパプではなく、かんぴょうや高野豆腐、キュウリ、卵焼きと酢飯を使った日本式の巻き寿司である。ただし味は独特だった。

黄玲玉：その巻き寿司の味が、甘くない巻き寿司。酢が多い。というよりは、砂糖が足りない。それが多分、甘いのがないから。オモニは精いっぱい、自分の中では巻きずしもどきをやってるの。

＊：ごちそう？

黄玲玉：それ、ごちそうよ。ハレの日やん、そのときはそれやったわ。

甘くなくても、玲玉さんにとっては「ハレの日」の「ごちそう」だった。「ごちそう」たるゆえんは、いつもとは違う料理だとか、当時日本で人気の弁当メニューであるとかいうポイントだったと思われる。

玲玉さんの食べものの話から読み取れる「故郷」も重層的である。中核にあるのは済州島的な生活文化だが、地元商店街で調達したもの、大衆的人気のあるもの、独特の味が混在していた。済州島の存在感が大きいのは、それを見分けて説明できる玲玉さんの知識が、条件として効いている。ただしここでもナショナルな枠の重要性は低い。まずは生きるため、手っ取り早い手段として選んだもの、体にいいもの等であることを重視した選択の結果だった。

4. 2. 2. （親の）故郷訪問

済州島との行き来

戦後のどさくさのなか漁船で日本に渡って死にかけて船が怖くなった母。しかし日韓国交正常化後、母はすぐにパスポートを取って渡韓した。空白の 20 年の間に済州島四・三事件があり、母のすぐ下の弟をはじめ、義兄ほか村の人が大勢亡くなっていた。早くに未亡人になったお母さん（玲玉さんの母の母親）が祖母（母のおばあさん）と 2 人で、また後には成長した末弟（玲玉さんの叔父）が、家族を守ってくれていた。

1978 年、玲玉さんも初めて韓国に渡った。先に着いていた母と合流し、生前の祖母（母のお母さん）にも会えた。研究生活に入ってからは、済州島調査に行くときは、母の費用は自分持ちにしてなるべく母を連れて行っていた[15)]。母の行きたい気持ちと、高齢ゆえ周囲に迷惑がかかるのを恐れる気持ち、また費用問題とのせめぎあいを慮っての提案であり、母は「これが最後や」と言いながら何回も行った。母は電話連絡もことあるごとによくしていたようだ。これらの過程で済州島は、母だけでなく玲玉さんにとっても、心理的・物理的に近く重要な場所になっていったことが推察される。

済州島の価値観

玲玉さんが済州島に通ううちに気づいたことがある。父が寡黙だった分、玲玉さんは母の口癖をよく思い出すのだが、それが必ずしも母固有の考え方ではなかったということである。例えば、母によく言われた、いただいたものや特別手に入ったものを「一人で豚みたいに食べるな」という言葉がある。人と「分かち合う」という教えだ。

> わたし的には、1 世じゃないからさ、韓国的なものっていうときの、引き合いに出すのは、オモニを出すしかなくて。（略）それは、済州島の人はみんなそんな感じやねん。最近（私は）、済州島行ったり来たりするでしょ。おじさんとこはみんなそういう感じやな。だから、オモニが特別だったわけじゃなくて、済州の価値観をオモニは実践してたんかなと、最近はそう思うようになってん。

母個人の信条かと思いきや、「済州の価値観」の実践だったという。母が島出身であると改めて実感させる材料にもなった。済州島訪問により、母と故郷の関係は玲玉さんに引き継がれ、同時に玲玉さん自身の研究の資源となっている。この点、芳子さんにとって韓国があくまで親の故郷であったこととは対照的である。

4. 2. 3.　日本で生きる知恵・力

強い母

もう 1 つ、玲玉さんが済州島の叔父伯母に会うようになってわかったことがある。母の生来のあるいは幼い頃から培われた性格だ。「おっとりした」姉と「かわいらしい」妹に挟まれ、母は「むちゃ仕事は早いけど粗い」、「不細工」な娘と位置づけられていたようだ。また「負けず嫌い」で、いつも村の友達と競争していたようだ。「日本来てとか、（前の）だんなさんが亡くなって強くなったとかじゃなくて、もともとがそういう部分があった」。

玲玉さんにとって、母はずっと、「生活力あるけどめっちゃ怖い人」だった。納期に追われる内職生活、都合が悪くなるとプイと出かけてしまう夫、そんなとき母が当たる相手といえば、実子で長女の玲玉さんだった。玲玉さんは母の前では常に緊張していたという。しかし母がもとから気が強かったのを知って、「怖い」母を、少し客観的に見る余裕ができたかもしれない。

母にはセイフティネットもあった。家で何かあって母がパッと出て行ったことがある。もう帰って来ないのではないかという不安になったが、しばらくすると母は平気な顔で戻ってきた。どうやら「友達とこ」で鬱憤を晴らしてきたらしい。家庭のストレスを発散する受け皿を備えた地域だったのだ。

一家は通称名で生活しながらも出自を隠すことはなかった。あるとき、近所で日本人と組んで何か活動することになり、その日本人は「朝鮮人と組むのイヤや」と言い放った。それに対して母は「どういうことや！」と抗議し、ついに相手の謝罪を引き出したという。

> うちのオモニは、そんな言われたらガーッと言えたみたい。それは 1 世が強いところで。植民地期に（日本に）いたわけじゃないからさ、余計に、屈服することないのかもしれないけど。

これと似た状況があったとき、玲玉さん自身は日本人にはっきり反論できなかったという経験がある。「1 世が強いところ」を叩き込まれることもなかった。

「知恵かな」

大人になってからも、玲玉さんは事あるごとに母の助言を求めてきた。例えば葬式のやり方である。合理的な技術や情報といったものではないが、なぜ玲玉さんは聞いたのだろう。

> 私は最初に親が亡くなるのはシアボジ（義父）なのね。火葬したときに、ほんっとに胸が痛くて。お

義父さん、さっきここにいてたのに、焼いてしまうっていうのが、すごい胸が痛くて、ずっと残ってんね。アボジがその後に亡くなってんけど、アボジが亡くなったときにうちのオモニが、火葬でバッと戸を閉めた段階で、「お父さん、火が入るから出ておいで」って言ったんね。それを聞いたときに、すごい、「物体は焼いてしまうけど、魂は出てきてるから熱くないんや」って思って、すごく、なんか、ちょっとホッとしてんね。それでうちのオモニが、「うちが死ぬときにもあんたがそう言うてや」って言うてんね。（略）わからないけど、ある意味では知恵かなと思って、そういうふうにしてる。

朝鮮半島ではわりと最近まで土葬が一般的だったことから、渡日 1 世は火葬に抵抗があるといわれる。それがわかる遺族にも、異郷での火葬は心苦しい中、心的負担を軽くする一言の「知恵」である。後に義母、最後に母が亡くなったとき、玲玉さんは母のやり方を実践した。玲玉さんは母の「力」を振り返って言った。

違う場所で育った人が違う場所に来て生きていくというのは、すごい生きる力やから、どっかで助けてもらってる。オモニのそういう力ってのは、私は信じてるところがあるかもしれない。

母が「違う場所に来て生きて」きた、まさにその場所で玲玉さんは生きている。もし移住しても、玲玉さんが信じる限り、母の「生きる力」は及ぶだろう。そのこと自体が玲玉さんの「力」になっていると言えよう。

玲玉さんの大阪、芳子さんの川崎は、それぞれの母にとっても一定の居場所を得た地である。生まれた場所が違う親子、また生活の場や経験も異なる 2 人の語り手だが、それぞれの場所で生きる「知恵」や「力」は、それを必要としたエスニック・マイノリティが広い意味で共有する生活文化と言えるのではないか。その意味で、強く生きた 1 世の親と生活した大阪や川崎という空間は、2 人の「故郷」の 1 つをなすように思われる。

5．おわりに

盧芳子さんと黄玲玉さんは、在日韓国・朝鮮人集住地域での生活、朝鮮学校就学経験、母の訪韓に同行したという共通点があった。これらは、日本で生きる在日韓国・朝鮮人という自覚、母の言語や故郷のリアリティなどを得る上で、大いに助けとなっただろう。しかし具体的にライフストーリーをみていくと、両事例の「故郷」の所在やかたちは互いに個性的である。どれかのネーションという枠のみで語れるものではない。初めは信じられなかったものもあれば、非実体的で二世にはまねができないと思われたものもある。冒頭の李恵子同様、「単純になることは許されない」ようなものなのだ。生活文化のライフストーリー分析は、そんな「故郷」認識にかたちを与える試みである。

分析からみえた「故郷」に関する示唆を暫定的にまとめておこう。2 世の「故郷」はどこに、どのようなものとしてあると初めから特定できるものではない。語り手＝ 2 世自身の経験、親との生活の意味を確認した材料の一つひとつ、それらが「故郷」を血肉化し、事後的に像を結ぶものではないか。親である渡日 1 世や本人の出身地は重要な構成要素になりうる。そこに可塑的に意味が加わっていくところに、2 世特有と思われる状況が見出せる。

最後に語りをもう 1 つ、書き留めておきたい。済州島の事情に詳しい玲玉さんは、インタビューでは補足説明しながら体系的に話してくれた。しかし玲玉さんも、母の渡日の話などは以前から友達との会話から断片的に聞いてはいたものの、「具体的なかたちで一つに物語としてつなぐ」ことができたのは、研究活動の一環で改めて聞き取りするようになってからだという。

＊：話を聞く前と聞いた後で、自分の思ってるのと違ったとか、オモニの一面を見たとかいうのはありましたか？

黄玲玉：そうやね、来た動機も含めて全然知らなかったから、聞いて初めて、「あ、そうなんや」ってこととかを知ったよね。それまでは、すごいバイタリティのある、オモニが一生懸命働いてる姿は見てたけど、例えば密造酒作ったりとか、そんなことがあるとは思ってなかったから。みんな同じようにやってた時期に、そういうことがあったんやなとわかって。オモニに対する考え方も、「一生懸命生きたんやな」っていうのをもっと感じるようになったよね。

「みんな同じようにやってた」という部分に注目したい。母を在日韓国・朝鮮人 1 世全体の歴史に位置づけたとき、玲玉さんは、いくらか客観的に母を再評価し、同時に自己の位置を確認することになったのだ[16)]。

「故郷」と向き合う日常実践は個々人において生涯続き、そのかたちは変化していく。そう考えると、昨今の朝鮮半島の南北関係の劇的な展開、日本の中の朝鮮半島のイメージの変化なども影響を与える要素となるはずで、今後ますます目が離せない。

付記：

- インタビュー協力していただいた盧芳子さん、黄玲玉さんに、記して感謝申し上げます。
- 本研究は JSPS 科研費 26380727 の助成を受けています。

注

1）本稿で在日韓国・朝鮮人とは、日本の植民地化を機に日本に渡った朝鮮半島出身者とその子孫を指す。また原則として、朝鮮半島関連の総称を「朝鮮」、南北いずれかの国家を指す際は日本での用法に倣い「北朝鮮」・「韓国」とするが、必要に応じ、インタビュー協力者や引用文献の用法に準じて記述する。

2）同書は、1990 ～ 2000 年に通巻 9 号発行された主に在日朝鮮人 2 世・3 世による同人誌的雑誌『ほるもん文化』の第 8 号にあたる。創刊の主旨は次の通り。「日本で生まれ育った……在日の有りようを、私たちの視座から可能な限り多くの局面で表現すること」（鄭雅英、1990、p. 152）。

3）1958 ～ 85 年に展開された、北朝鮮帰国を希望する在日韓国・朝鮮人の集団的・組織的運動。日本人妻を含む 9 万人あまりが出身地でもない土地に「帰国」した（朴、2010、pp. 88–9）。

4）在日韓国・朝鮮人の 2 大民族団体の 1 つである大韓民国民団（民団）の事業であり、在日本人総連合会（総連）傘下の者に故郷訪問する機会を提供した（尹、2010、p. 385）。

5）1962 年に始まった、日本生まれの在日韓国・朝鮮人を対象とする韓国留学制度。北朝鮮にも留学が認められたことがある（鄭雅英、2010、p. 386）。また鄭大均（てい・たいきん）は、「父祖の故郷」である韓国に暮らす日本生まれ 2 世の体験談を集め、韓国現地人から期待される一方で見下されもするという、「在日僑胞」の微妙な位置を報告している（鄭、1987）。

6）在外同胞政策においては日本在住「朝鮮籍」同胞への処遇が「韓国籍者」と区別され、また政権の意向しだいで対応が変化してきた。

7）伊藤亜人は民俗文化／生活文化を区別していう（伊藤、1996、p. 164）。前者は「古いもの」、後者は「現在進行形のもの」に焦点をあてた区分とみられるが、本稿の対象は両方にまたがる。

8）1980 年代に弘前大学で合同研究プロジェクト「北日本文化の継承と変容」がもたれた際、シンポジウム「外来文化の受容」において、国家単位の文化論や日本文化内の特殊性といったネーションの枠に固執する立場と、これに疑問を唱える立場が正面からぶつかった記録がある（弘前大学人文学部人文学科特定研究事務局、1987）。文化論議におけるナショナルな枠組みの強力さをうかがわせる。

9）国家が日常生活に介入することもないわけではない。たとえば古代律令国家でコメを聖化し肉を穢れとする価値観が形成されたが、それは、農業・租税に関心をもつ統治者の事情からだった（原田、2009）。またナチスドイツでは、食料経済政策として「アイントップ（雑炊）の日曜日」キャンペーンが張られた（藤原、2016）。

10）同調査では祖父母世代回答者の 1. 1%が「子どもの頃の居住地」を「朝鮮」と答えたくらいである。なお設問文の住宅設備「くど」とは西日本に見られる表現で、「かまど」を意味する。

11）後者の意味の故郷は徐の用語法でいう「祖国」にあたるが、本稿では国家に限らず、時に朝鮮半島、時にはある地方といった範囲を緩やかに指すことにする。

12）共同研究メンバーは猿橋順子（社会言語学）、髙正子（文化人類学）、柳蓮淑（ジェンダー論）である。11 人の在日韓国・朝鮮人 2 世を主たる対象とし、日本各地および韓国済州島でインタビュー調査を行った。親＝在日 1 世として特に母親に注目したため、本稿との関連では父に関する聞き取りが少ないといった、データの制約がある。なお本稿執筆過程では元共同研究者たちに有益なコメントや示唆をいただいた。記して感謝する。

13）M.L. ハンセンの移民世代論「1 世は故郷を懐かしみ、2 世は忘れようとし、3 世は思い出す」（Hansen, 1937 → 1990）は、理論というには粗雑だが、経験的に否定できない説として繰り返し参照されてきた。在日韓国・朝鮮人について反証する補助線として示しておく。

14）芳子さん一家が埼玉から川崎に移ったころ、川崎の同胞の間では北朝鮮への帰国運動が盛り上がっており、長女？の家族も帰国船に乗った。何度か母は「うちも（中略）北に帰ろう」と、荷物をまとめたことがある。実在の故郷がある南部ではなく「北に帰ろう」とした背景には、故郷の両親に対する母の複雑な思いが絡まっていた可能性がある。

15）嫁ぎ先の義父母が他界した後である。生前は介護・看護もあったし、実家の母だけ誘うのは嫁

として憚られたようだ。

16）この点、自己に向きあう過程で両親の日本での生活史に手がかりを求めた金秀一のアプローチと重なる。『ふるさと考』収録エッセイで、金は次のように書く。高校生の頃、「もう少し、自分の抱える背景、民族を見つめ直し、もう少し、自分を好きになる努力を始めた。結局のところその作業は自分の両親の生活史をとらえかえすことにつながっていった。それはもちろん朝鮮半島でのオモニ、アボジではなく、子どもをかかえ、日本ではじめて生活をはじめた三丁目の生活であった」（金秀一、1998、p. 86）。そこで必要とされたのは、両親の生活史全部や故郷そのものではなく、自らと関わる生活史への理解であり、親と自分の重層的な「故郷」である。

文献

バーバ、ホミ・K（2009）「ナラディヴの権利」『ナラティヴの権利 ── 戸惑いの生へ向けて』（磯前順一、ダニエル・ガリモア訳）　みすず書房　pp. 5–10.［原著：Bhabha, Homi K.（2000）. The Right to Narrate. In Originally published by Misuzu Shobo Ltd., Tokyo 2009］.

鄭雅英（1990）「い・い・わ・け」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化① 1 冊まるごと在日朝鮮人』　新幹社　p. 152

鄭雅英（2010）「母国留学」国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会『在日コリアン辞典』　明石書店　p. 386

藤原辰史（2016）『決定版 ナチスのキッチン ── 「食べること」の環境史』　共和国

Hansen, Marcus L.（1937→1990）. The Problem of the Third Generation Immigrant［Delivered to the Augustana Historical Society Rock Island, Ill., May 15 1937］, In Peter Kivisto & Dag Blanck（Eds.）, *American Immigrants and Their Generation: Studies and Commentaries on the Hansen Thesis after Fifty Years*（pp. 191–203）. University of Illinois Press, Urbana & Chicago.

原田信男（2009）「『コメ志向』再考」原田信男ほか『食文化から社会がわかる！』　青弓社　pp. 15–58

弘前大学人文学部人文学科特定研究事務局（1987）『北日本文化の継承と変容』

伊地知紀子（2010）「本貫」国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会『在日コリアン辞典』　明石書店　p. 390

伊藤亜人（1996）『アジア読本 韓国』　河出書房新社

姜誠（1998）「『泥棒マーケット』── わが心のふるさと」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化⑧ 在日朝鮮人「ふるさと」考』　新幹社　pp. 70–81

金秀一（1998）「『群電前』とオモニ、アボジ、そして私」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化⑧ 在日朝鮮人「ふるさと」考』　新幹社　pp. 82–87

金栄（1998）「『道飛館』のある街 ── 川崎・群電前」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化⑧ 在日朝鮮人「ふるさと」考』　新幹社　pp. 88–108

李恵子（1998）「わたしがいるまち」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化⑧ 在日朝鮮人「ふるさと」考』　新幹社　pp. 109–116

朴正鎮（2010）「帰国運動」　国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会『在日コリアン辞典』　明石書店　pp. 88–89

徐京植（聞き手：金栄）（1998）「引き剥がされた者たち ── 徐京植さんに聞く」ほるもん文化編集委員会『ほるもん文化⑧ 在日朝鮮人「ふるさと」考』　新幹社　pp. 11–40

末広菜穂子・石田美清・竹林栄治（2007）『家庭生活の世代間変化と生活文化の継承性 ── 子ども時代の生活に関する中四国地方での調査報告』　広島経済大学地域経済研究所

鄭大均（1987）「父祖たちの故郷 ── 在日韓国人の韓国体験」拓殖大学海外事情研究所『海外事情』35（2）、67–91

尹明憲（2010）「母国墓参訪問団」国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会『在日コリアン辞典』　明石書店　pp. 385–386